

# 水稲現地ほ場における実際の防除体系と穂いもちの被害程度

福島県農業総合センター 生産環境部

## 1 部門名

水稲-水稲-病虫害防除

## 2 担当者

鈴木洋平・山田真孝

## 3 要旨

県内での育苗箱施用剤の普及が進み、いもち病の防除体系が変化している現状を踏まえ、現地ほ場調査、アンケート調査によって2009年の生産者が行った実際の防除体系といもち病発生の解析を行うとともに、2003年に行われた同様の調査結果と比較した。

- (1) 2009年、福島県中通り地方のBLASTAMによるいもち病感染好適条件は7月上旬から8月上旬にかけて、頻繁に出現しており、葉いもち発生に好適な気象条件であった。現地調査を行った郡山市多田野地区のいもち病の発生状況は、少発生から多発生まで、ほ場間にばらつきが見られた。
- (2) 2009年の気象条件下で、本田での茎葉散布剤のみの防除体系では、初期に葉いもちが多発してしまい、穂いもちの発生を十分に抑制することができないほ場が見られた。
- (3) 一方、育苗箱施用剤を用いた防除体系では、葉いもちの感染時期を遅らせる効果が顕著に現れ、結果として、穂いもちの発生も十分に抑制していた。
- (4) 2003年は、低温の影響で出穂期が平年よりも遅れるとともに、8月に入ってもいもち病の病勢進展が続いた。こうした気象条件下では、育苗箱施用剤を施用したほ場でも穂いもちに対する防除が必要であった。
- (5) 2009年の結果は、育苗箱施用剤により、初期の葉いもちを抑え、感染時期を遅らせたことが、穂いもちの抑制につながった顕著な事例として捉えることができる。したがって、いもち病の発生リスクの高い地域では、予防的措置としての育苗箱施用剤の有効性は明確であり、茎葉散布剤の防除時期が遅れるなどの人為的ミスを防ぐ上でも重要である。

## 4 主な参考文献・資料

- (1) 平成15年度農業総合センター試験成績概要(2003)
- (2) 平成21年度農業総合センター試験成績概要(2009)